

入院・手術 怖くないよ

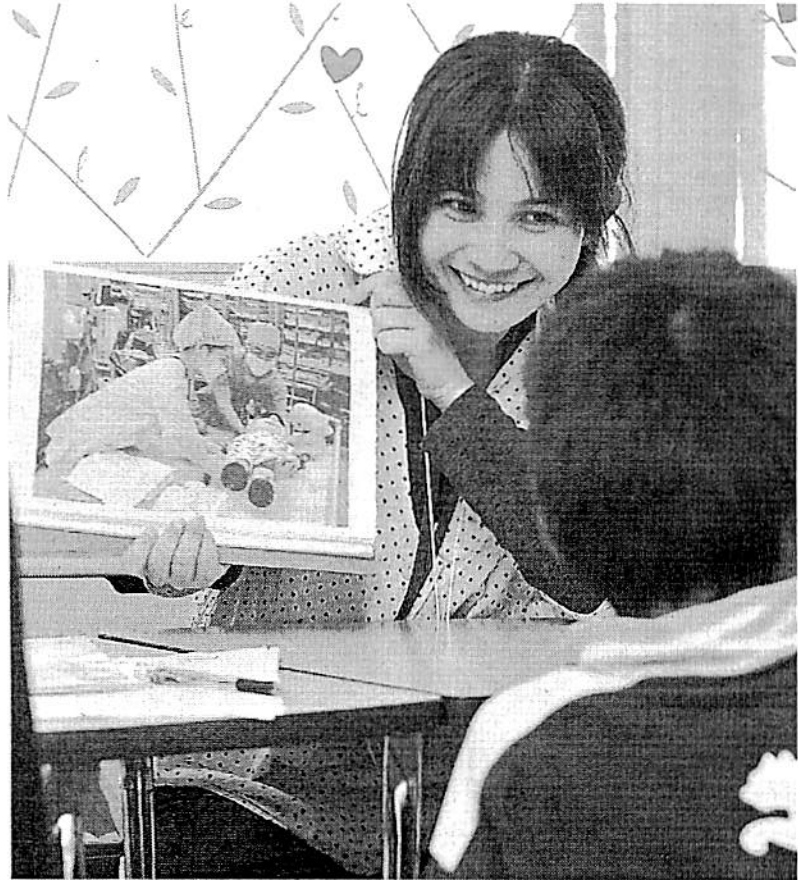
「子ども療養支援士」今春始動

病気や障がいを持つ子どもの心を支援する専門職「子ども療養支援士」が今春、始動する。子ども目線に立って入院や治療への不安を和らげ、前向きに治療に臨んでもらう仕事だ。民間の団体が養成した第1期生2人が医療の現場に立つ。

「中からふわっと風がくるよ」。才木みどりさん(35)が、この日入院する男の子(5)に手術で使う麻酔用のマスクを差し出した。「寝ている間に手術は全部終わっているからね」。才木さんの言葉に、男の子はほっとした表情をみせた。

昨年12月、大阪府和泉市にある大阪府立母子保健総合医療センター。元保育士の才木さんが「子ども療養支援士」を目指し、実習中だった。

人形の「サム君」が主人公の写真本を使い、手術や病院



④入院する子どもに写真本を使って病院生活の説明をする実習生の才木みどりさん⑤手術室ツアーでは、病棟から手術室まで歩く。壁や天井には森や水の中をイメージした絵が描かれている。いずれも大阪府和泉市の府立母子保健総合医療センター、中里友紀撮影

生活について説明するのは、心の準備をしてもらう「プレパレーション」。痛みが伴う治療の場合は、隣で言葉をかけるなどして気を紛らわせる「ディストラクション」をする。「大事なのは子どもの表情を見ること」と才木さん。

小児科の看護師出身の実習生、喜納好香さん(28)はかつて、医療処置を優先させるため嫌がる子どもを押さえつけて処置をしたとき、心理的なケアが十分に行き届かないことに悩んだという。支援士の実習で、家族も処置室と一緒に入ってもらい、母親に子を抱きかかえてもらって注射する場面に驚いた。

「慣れない病院や知らない大人に囲まれる治療は、子どもにとって不安の連続なんだと改めて気づいた」

こうした専門職は、英国では国家資格のホスピタル・プ

写真本使い説明 ■ 痛む時、話しかけ

レイ・スペシャリスト(HPS)、米国とカナダではチャイルド・ライフ・スペシャリスト(CLS)と呼ばれ、認定制度が整備されている。日本でも英米で資格を取ったり、静岡県立大学短期大学部主催のHPS養成講座を受講したりした人が90人ほどいる。

「日本でも独自に専門家を増やそう」と、医療関係者が子ども療養支援協会(事務局・順天堂大学医学部小児科)を立ち上げたのが2年前。昨春から大阪と東京で認定コースを始め、4人が受講した。協会は「将来は国家資格に育てたい」という。

140時間の講義と700時間以上の病院実習をこなした才木さんは2月末、協会初の子どもの療養支援士に認定され、4月から宮城県立こども病院で常勤の支援士として働く。「目の前にいる子どもの助けになるよう頑張りたい」。(中里友紀)

⑥朝日新聞デジタルにスライドショー

